ラサリーラー
愛のマンダラ
『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

第1部

クリシュナ、牛飼いの王子

クリシュナが若者に成長する頃には、村の少女たちや女性たちは、誰も皆彼に恋をしていました。彼はとても魅力的で、巻き毛と輝くような黒い肌がりりしく、瞳はとても優しいと、彼女たちは言いました。彼と一緒にいると、一人一人が自分が美しく特別に感じられたのでした。そして、彼には横笛がありました。彼はいつもそれを手にしていて、他の誰よりもすてきに吹くと皆が同意していました。彼が吹いているのが聞こえた時はいつも、お互いに顔を見合わせて、ほほ笑みました。そして、その音の方向にただ引き寄せられるしかない理由を見つけるのでした。彼女たちが着くと、自分たちだけがクリシュナの横笛の音に引き寄せられたのではないことを知るのです。シカは近くのまだら模様の木陰に立っていました。小鳥は木に止まって聞いていました。チョウは彼の髪に止まりました。そしてしばしば、その中の一人のとりわけクリシュナに心酔しているラーダーという名のゴーピーが、彼の足元に座っていました。

さて、年に何度か、ヴリンダーヴァンの男女が森に集まって踊る伝統がありました。若者にとって、ラサは求愛の儀式であり、自分の配偶者を見つけることを期待する時でした。彼らは何週間もの間、それを心待ちにしました。夜になって仕事が終わると、踊りのステップを完成させようとしている彼らの姿を見ることができました。少女たちは練習しながら、それぞれが心の奥深くで、クリシュナに望みを託し、彼が彼女の愛に応えてくれることを願っていました。

クリシュナはこのことを知っていました。そして彼は神の生まれ変わりなので、彼に対して彼女たちが感じている愛情は、もっと奥深くのものから生じていることを知っていました。それは、すべての分離の終わりへの強烈な願い、神との一体性への切望でした。

彼は、次の満月の夜に、彼女たちが自分たちの切望を理解するのを助け、それをどう果たせるかを教えようと決めました。

© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。